

## シェーラーの実証主義批判と実証科学の位置

千葉 芳 夫

シェーラー、マンハイムに限らず、一般に知識社会学の特徴の一つとして、反実証主義的傾向を挙げることができる。これは特にドイツの知識社会学の思想的位相を考える場合には、見落とすことのできない点であろう。ハミルトンによれば、この特徴が最も明瞭に表われているのは、シェーラーにおいてである。「シェーラーは、彼の生涯を反実証主義の聖戦、つまり、彼が西洋社会の特徴であり、近代の生の葛藤と社会的な病理に対して責任あるものとみなした科学崇拜に対する戦いに捧げた、ということができ得るであろう。」<sup>①</sup> しかも、マンハイムの実証主義批判が主に方法的なものであるのに対して、シェーラーのそれは文明論的である。ドイツ知識社会学の研究には、両者の関連を検討することが不可欠であろうが、本稿では、さしあ

ってシェーラーの実証主義批判を考察し、ドイツ知識社会学の思想的背景に迫るための一助としたい。

### 一 実証主義批判

シェーラーが批判の主要な対象としたのは、スペンサーやコントの実証主義的歴史哲学であるが、彼は、コントの三段階の法則がその思想を代表するものとみなしていたらしく、この法則を特に批判している。コントは人間の精神が神学的段階から形而上学的段階を経て実証的段階へと進歩していくと主張した。だがシェーラーによれば、こうした知識の発展段階説は根本的に誤りである。宗教⇨神学、形而上学、実証科学は、「知識の発展の諸展開なのではなくて、人間精神それ自体の本質とともに賦与された本質的な

持続的な精神態度であり、『認識形式』なのである。<sup>②</sup>こうした立場からなされるシェーラーの実証主義批判には、二つのものを区別することができる。

まず第一に、シェーラーによれば、コントの三段階の法則の背後にある「実証主義的な知識の理想」は、「認識目標の途方もない制限」のうえになりたっている。実証主義は予見することによって統御しうるような世界内容や世界関係だけを取り上げ、また、「感覚的現象のたんなる法則（量的に規定可能な関係）」の発見のみを目指している。<sup>③</sup>これは、実証主義が実証科学を最高の知識理想、さらに言えば、唯一の知識の形態としている、ということにほかならない。こうした見方に立てば、神学＝宗教や形而上学は、古い、知識以前の知識として否定され、歴史的に克服されるべきものと考えられることになる。だが、このような見解は宗教や形而上学の本質の誤解のうえに成り立っているのだ、とシェーラーは批判する。宗教、形而上学、実証科学は、知識の目標や動機、あるいは歴史的運動形式などをそれぞれ異にする、しかしながら「課題や問題としてそれぞれに人間精神に根源的に固有な」知識であり、同等の権利を持つ知識なのである。<sup>④</sup>

このようにシェーラーの捉える実証主義とは、実証科学

を最高の、あるいは唯一の知識とみなす思想である。これに対して彼は、宗教、形而上学、実証科学のそれぞれが人間にとって本質的に必要な知識であると主張しているのであり、何人かの論者が指摘するように、彼の知識社会学は実証主義に抗して、宗教と形而上学の（知識社会学の時期には特に形而上学の）権利の回復を実践的な目標とするものだったのである。<sup>⑤</sup>だが、ここで注意しておくべきことは、彼が実証科学の必要性は認めており、思想としての実証主義は批判しても、実証科学そのものを否定している訳ではない、ということである。実証主義と実証科学の明確な区別、これはシェーラーの実証主義批判の一つの特徴だといえるであろう。

第二に、シェーラーは、三段階の法則に示される実証主義の歴史認識に対して、次のような批判を行なっている。三段階の法則は、「最近三百年間の西ヨーロッパ的な知識の運動形式の、あまつさえ一面的に見られたものを……人類の発展全体」の法則<sup>⑥</sup>とみなしている、と。これは表面的には過度の普遍化に対する批判である。だがそれだけではなく、彼は、ヨーロッパとは異なり、インドや東アジアでは形而上学的精神態度が優位を占めているという事実を指摘し、ヨーロッパ的な、苦悩の諸原因に対する積極的な抵

抗よりも、アジア的な「忍耐の術」のほうを高く評価している。<sup>⑦</sup>ここには彼の脱西洋中心主義的な視点が示されていると言えよう。

だがこの点に関するシェーラーの批判には、微妙な問題が含まれている。というのは、過去三百年間の西ヨーロッパの現象に関しては、実証主義の見解を認めているととれるからである。シェーラーは実証主義の見解を価値序列の面からは否定しながらも、事実認識としては——少なくとも西ヨーロッパに関しては——認めている、ということになる。実証科学の優位は、実証主義が主張しているだけのもではなく、近代ヨーロッパの現実である。シェーラーの批判が実証主義批判を越えて、近代ヨーロッパ文明批判にまで到らざるをえないのはこのためなのである。

## 二 近代ヨーロッパ文明批判

「知識社会学の視点からすれば、価値自由的な実証科学の『単独支配』の傾向(……)は、常に科学自身が技術主義へと墮落していく傾きを意味している……」<sup>⑧</sup>

「……西洋の対自然的な技術主義とその知識上の現われたる実証科学とがもたらす脅威によって、人間はたんなる機械装置や支配することだけが問題であるような物件へと

陥りかけている」<sup>⑨</sup>

「諸人の幸福が〈歴史のなかで〉増進するという十八世紀の夢ほど無残に事物の成り行きによって打ち砕かれた夢も少ない。このような幸福の高揚のために動員された手段、道具、〈機械〉、組織のもろもろが、それら自体のなかにへまたそれらのメカニズムのなかに」人間の活動と心とをあまりに深く編み込んでしまった結果、そのためにこそそれらが企図された当の目的は完全に忘れ去られてしまった。またその結果、人間はこの技術的手段世界に——その独自の法則性、そのもろもろの偶然や測りしれなさに——その除去策としてこそこの手段世界が考案され制作された当のもろもろの禍いによりも、根柢的にもっと多く悩むのである」<sup>⑩</sup>

これらの批判には、様々な要素が含まれている。(例えば、最後の引用文からは、ジンメル流の文化の悲劇論の色彩が色濃く感じられる。)だがこれらの批判が、実証科学を唯一最高の知識とすること——逆に言えば、宗教、形而上学、実証科学の調和が失われたこと——自体に向けられているのではなく、人間の非人間化という事態に向けられていることは明らかである。第二の引用に示されているように、人間が機械や物に墮しつつあるのだ。そして、その

直接の原因は、実証科学の単独支配によって科学が技術主義に陥ったことに求められている。シェーラーによれば、支配知（実証科学）は教養知（形而上学）に、教養知は救済知（宗教）に奉仕すべきである。だが、本来は一番低い位置に置かれるべき支配知が唯一最高のものとされる、という逆転現象が生じている。実証科学は手段的・道具的な知識である。それが本来仕えるべき目的を喪失したとき、あるいは、自己目的化したとき、そこに生じるのは人間そのものの手段化——つまり、機械や物と化すこと——である。実証科学、形而上学、宗教の序列に関するシェーラーの見解を受け入れるかどうかは別にして、このような批判は我々にはなじみ易いものではないだろうか。

### 三 原因に関する議論

では、このような現象が生じてきた原因はどこに求められるのだろうか。この点に関するシェーラーの議論は、必ずしも一貫したものではない。知識社会学関係の論文においても、次の三つの議論を挙げることが出来る。

#### ①近代ブルジョワの無制限の支配への意志

先ず第一は、近代ヨーロッパの支配的な人間類型であるブルジョワの衝動構造に主要な原因を求める議論である。

「……ブルジョワ的な新しい人間性の典型、およびその新しい欲動構造とその新しいエトスの中に、近代の科学の論理的なカテゴリー体系の根源的な改変ならびに新しい同じく根源的である自然支配への技術的欲動が基礎をもつ。」<sup>⑫</sup>ブルジョワの欲動とは、「無制約の、すなわちいかなる特殊の欲求によっても限定されることなく、エトスと意志によって精査されるような、あらゆる種類にわたる一時的ならぬ体系的な自然支配や、自然と心についての知識の無制限の集積と資本化へと向かう欲動」<sup>⑬</sup>だとされる。こうして、近代ヨーロッパの資本主義社会においては、すべての認識活動において、「自然と心への新たな支配の意志」が優位を占めるようになり、「教養のための知識や救済のための知識を求める努力はこの意志の下に屈服させられてしまう。」<sup>⑭</sup>

近代科学には、質に対する量の、実体に対する関係のカテゴリーの優越、等々のカテゴリー的特徴が見られる。これらをシェーラー<sup>⑮</sup>は、近代科学の基礎をなす支配への意志から説明している。近代科学はまた、ある方法に従って「無制約的過程」を通じて新しい知識を獲得しようとする「方法への意志」に基づけられている。こうした近代科学の特徴は、ブルジョワの支配への意志と、資本主義経済の「限界を知らぬ営利活動への意志」とに意味的に対応して

いる、とされる<sup>⑮</sup>。意味的対応とは、ブルジョワの衝動——支配への意志が近代の科学を生み出す、というような一方的な関係をシェーラーは認めておらず、あくまでそれを平行的な関係として捉えている、ということである。しかし、両者が同じ方向性をもつものである限り、ブルジョワ的意志が支配的である近代資本主義社会にとっては、実証科学がもっとも適合的な知識の形態だ、ということになるであろう。実証科学の単独支配という現象は、まずはこのように説明されている。

## ②ヨーロッパの精神史における支配への傾向

だが支配への傾向は、ブルジョワの衝動構造や近代の実証科学の内にのみ見出されるものではない。シェーラーはそれをキリスト教的ユダヤ教的な創造神の思想の内にも認めている。「ギリシア人もローマ人も、プラトンもアリストテレスも知らなかったところの意志し労働し創造する超感覚的な神……が労働の思想および人間以下の事物に対する支配の思想を最大限神聖化する」<sup>⑯</sup>。そして、西欧においては、宗教と実証科学とが共同し、ほとんど常に形而上学に勝利をおさめた。これは「……ローマ的な実践的支配精神が手に入れた根本的に共同的な勝利に他ならない。」とすれば、支配への意志の優位は、近代に固有の現象では

なく、西欧においてはそれ以前から見られる傾向だ、ということになる。

ところでシェーラーは、形而上学を自由な思索と規定し、支配への傾向をもつ宗教や実証科学と対抗関係にあるものとして位置付けているように思われる。だが、インドの形而上学が、「自然との全く直接の交流、魂の生きとし生けるものにおける一体感および没入、そして人間と人間以下のあらゆる生き物とのほとんど民主的とも言える形而上学的な統一意識を前提にしている」のに対して、都会的思考の産物である西欧の形而上学の基礎には、「すべての自然に優越する存在者としての思惟的人間のまったく別の自己意識、自己意味がある」<sup>⑰</sup>。このことは、西欧の形而上学が実践的な支配への傾向そのものは持たないにしても、少なくともそれを容認する質のものであることを意味する。とすれば、西欧の精神史においては、シェーラーが明示的に述べている以上に強く——つまり、形而上学をも含めて——支配への傾向が存在するということになる。そして、近代ヨーロッパにおける支配への意志の優位、実証科学の単独支配も、近代に根をもつ、近代固有の問題ではなく、ローマ、あるいはキリスト教以来の西欧の精神史の当然の帰結である、ということになるであろう。

だが、そうであれば——逆説的なことだが——ブルジョワの支配への意志との意味的対応によって実証科学の単独支配という現象を説明することは困難になる。宗教も支配への傾向を有しているのであれば、宗教もそれと適合的だということにならざるをえないであろう。実際、シェーラーも近代科学の成立の条件として、宗教に関わる要因をいくつか挙げている。例えば、宗教改革による階層的な教会の統一と教会権力の破壊、ならびに、それと平行して生じた古い、生態的な世界観の破壊。又、宗教改革による靈魂の全エネルギーの世俗的労働と職業への転換。更に積極的なものとしては次のような主張が見られる。「啓示宗教こそ『超自然的』信仰領域を一層鋭く隔離し、それを絶対的に完結し肥大しえぬものと主張することによって、まさしく実証科学的合理主義の開拓者となる。」<sup>②</sup>だが、そうであるとしたら、なぜ実証科学が優越するようになったのに対して、宗教は衰退したのか。シェーラーは、宗教の衰退の原因は宗教そのものの内に、「その生き生きとしたエトスの枯渇と死滅」にあると主張する。だがこの主張は、実証科学の優位を説明する仕方とは全く異なったものである。ここには、精神と衝動の二元論に立ち、そのうえ、宗教、形而上学、実証科学という三種の知識の異質性と自立性と

を強調するシェーラーの立場の弱点が露呈しているのである。

#### 四 実証科学と技術

以上の考察では、近代ヨーロッパの知的・精神的な危機的状况を生み出した根本的原因は、いずれにせよ、西欧における支配精神の優位に求められていた。そのために、宗教、形而上学、実証科学の(シェーラーから見た)本来的な秩序が崩壊し、実証科学の単独支配が生じたのである。この限りでは、三種の知識のアンバランスが問題なのであって、実証科学それ自体には問題はない、ということになる。だがシェーラーは、実証科学を全面的に肯定している訳ではない。彼は実証科学が技術主義に墮落しているとみなしていた。そして、「実証科学の背後に哲学と形而上学とが、可能な限りの支配を求める原理によって制限されることのない純粹な理論として……存在している場合においてのみ、実証科学は技術主義への墮落から免れうる」と彼は主張している。つまり彼は、近代の実証科学を、本来の科学の墮落形態とみなしている訳である。とすれば、近代ヨーロッパの精神的・人間的危機の一因は、このような実証科学それ自体の内に求められることになるだろう。では、

実証科学はなぜ技術主義に墮落したのか。以下ではこのことを中心に、シェーラーの実証科学についての議論を検討していきたい。

シェーラーによれば、実証科学は「自由な思索的人間の階級と、労働と手工業の経験を合理的に集中させてきた人々の階級」という「本質的に異なった源泉」から生れる。言い換えれば実証科学は「哲学と労働の経験との結婚による子供」なのである。そして、実証科学が「純粹に理論的な認識態度」や「理論的・数学的な方法」、又「視野の世界全体への拡大」に到達しえたのは、前者の影響によるものであり、他方、それが自らの関心を「世界の測定可能な量の側面」、「現象の空間的時間的關係の法則」、「可能な運動に従属する事柄として把握されるもの」へと制限することになったのは、後者の影響によるのだとされる。つまりシェーラーは、実証科学の内に支配への傾向と共に、それとは対立的な、目的から自由な思索という傾向も存在している、と見なしているということである。又、後者の階級は自然の支配への強い関心を持っている、と述べられており、このことからすれば、実証科学の支配への傾向は、労働と結びつく技術の側面によってもたらされたものであり、他方実証科学を純粹理論の側面において捉えれば、それは自

由な思索活動だ、とシェーラーは考えていると解釈しうる。とすれば実証科学の技術主義への墮落とは、「技術」の側面が「理論」の側面に優越することを意味することになる。シェーラーはそれに対して、科学の内における自由な思索の回復によって、科学そのものを救おうとしていることになる。

だが、実証科学が、その純理論的な側面においては、支配への傾向を帯びていないという解釈は、そもそも実証科学が自然(や社会や心)の支配のための知識である、というシェーラーの定義とは矛盾することにならないだろうか。又シェーラーは、実証科学と技術との関係について、次のように述べている。「生産技術と人間労働との(技術的な意味での)諸形態」は、「実証科学的な思维の諸形態と平行關係をなす」。これは、一方では技術を純粹な科学の後からの応用と見なす主知主義的見解を拒否すること、又他方で、技術だけが一方的に科学を導くというプラグマティズムやマルクス主義の見解を拒否することを意味している。「技術が学問を先導するのと同じくらいしばしば、学問が技術を先導し、それを狩り立てる」<sup>⑤</sup>のである。ここに見られるのは、科学と技術の二元論の立場である。だがそうであれば、実証科学の持つ支配への傾向の源泉は、技術ではなく、

科学それ自体の内に求められねばならないことになるであろう。そしてシェーラーも、「……現存するもののあれこれの領域(神々、魂、社会、自然、有機物、無機物、その他)に向けられた支配と制御の意志こそが科学的思考の目的と同様に、思考や直観の方法をもすでに規定している」<sup>③</sup>として、このことをはっきりと認めているのである。

次に、科学の成立と発展の過程において自由な思索『形而上学・哲学がどのような役割を果たしたのか、という点に関するシェーラーの議論を検討しながら、この問題についての考察を進めよう。「実証科学は、一般にヨーロッパでもアラビアでも中国でも、どこでもそれが成立したところでは哲学と労働の経験との結婚による子供であったし、また現にある」<sup>④</sup>とシェーラーは述べる。だが、エジプトや中国では「自由な哲学的思索の欠如」によって、それは「一個的方法的に共同作業に向けて組織化され世界の諸領域に配分されて、宇宙の全体を把握するような実証的専門科学」にまでは到らなかった。<sup>⑤</sup>又ローマでは、「自然支配の意志の範囲が……政治的な支配の意志と政治的な支配の技術とがローマの技術に与えている限界によって制約されて」おり、第二に、「ローマの支配層の遺伝的精神に……哲学的に観察するというセンスが欠けていた」<sup>⑥</sup>。明らかに、自由

な思索(『形而上学・哲学』)の欠如は、支配の意志が直接的な技術的あるいは政治的目的と結び付くことによって制限される、ということに関連している。ローマについて言われているように、「だから自然支配への意志というものが、この自然支配そのものために、また純粹な経済的目的と労働の蓄積そのものために、という具合に生じてこない」のである。<sup>⑦</sup>とすれば、逆に言えば、自由な思索は近代科学に見られるような無制限の支配への意志をもたしめたのだ、ということになる。だがそうであれば、そこでの自由とは、無制限という意味の自由であって、(特に支配という)目的から自由だという意味ではないことになる。

このようにシェーラーの具体的な議論に則するならば、実証科学はその理論の側面においても初めから支配への意志を持っていた、ということになる。ただ、それが全面的に展開されるのは、近代ヨーロッパにおいてのみだった、ということである。そしてこのことは、実証科学が、そもそも、程度の違いこそあれ、近代科学と同じ技術主義への傾向を有していた、ということの意味する。そして実証科学の発展は技術主義への傾斜を強めていく過程でもあった、ということになる。にもかかわらず、シェーラーは実証科学に対する形而上学・哲学の意義を強調し、現在において



も、形而上学や哲学との結合によって実証科学が技術主義への墮落から免れうる、と主張している。これは、形而上学の復権によって実証科学を救おうとする彼のイデオロギイ的立場の表明であるとも見ることもできる。だが、もう一つには、シェーラーには、支配のための知識である実証科学とは異なつた科学の理想があつたのではないか、とも考えられる。これは憶測に過ぎないものとなるが、あるいは彼は、技術との直接の結び付きをほとんど持たないギリシヤの科学を理想のものと見ていたのではないだろうか。だがその場合、ギリシヤの科学は、シェーラーの定義する意味での実証科学とはもはや見なされえないのではないか。彼は、実証科学以外の科学を認めるような議論を明示的には行なっていないが、彼の实証科学の定義は、近代科学には問題なく当てはまるが、それ以外の科学や、彼の議論の内にうかがえる本来の科学のイメージとは食い違つてゐると思われる。こうしたことが科学自体の性質の変化によつて生じるのであれ、あるいは科学と技術の結び付きの変化によつて生じるのであれ、シェーラーの議論には、この変化を捉える視点は基本的に欠如してゐるのである。

このことは又、実証科学の起源についての彼の議論に混乱を生じさせてゐる。ストードは、「哲学と労働の結婚」は

ルネッサンスに始まる、と解釈してゐる。<sup>⑤</sup>とすれば、実証科学は近代西洋の科学と同じだということになる。そして、確かにこの解釈の方が、実証科学に関するシェーラーの議論と適合的ではある。しかしシェーラーは、実証科学はヨーロッパだけではなく、アラビアや中国でも成立したとはつきり述べており、又、ヨーロッパでは古代ギリシヤにその起源を求めている。<sup>⑥</sup>我々は——残念ながら——ストードの解釈を受け入れる訳にはいかないのである。

シェーラーは、宗教、形而上学、実証科学が「自然、歴史神話的思考や直観」から分化してきたのだ、と述べてゐる。<sup>⑦</sup>又彼によれば、「あらゆる種類の知へと向かう性向は、人間が高等脊椎動物とくに類人猿と共有するところの生得的欲動衝動に由来する。」<sup>⑧</sup>これはつまり、好奇心のことである。そして、好奇心から知識欲が生れ、それが宗教、形而上学、実証科学という三種の——シェーラーの表現によれば、知の最高の諸様態の——知識を生む情動や欲動へと分岐するのである。好奇心、あるいは知識欲が神話と対応するのかどうかは明らかではないが、三種の知識が何かから分岐してくる、という図式は共通してゐる。しかし他方彼は、次のようにも述べてゐるのである。「宗教および形而上学の情動ならびに精神的認識態度だけが、『ホモ・サピ

エンス』に特殊な独占物なのであって、これに対して技術と実証科学との同一の根は(……)『実践的・技術的知能』という動物においてさえ認められる能力が漸次継続的に形成されたものにすぎない。④だがそうであるとすれば、技術や実証科学は、宗教や形而上学より古くから存在したということになるのではないか。そして、少なくとも技術に関しては、シェーラーはこのことを認めるような発言をしている。曰く、「……元来は等しく自然の諸力を支配する呪術的な技術だったのが、一方は実証的な支配の技術へ、他方は神聖な出来事を宗教的祭儀によって表現する技術と提示技術へと分化したのである。④」呪術的な技術とは、神話の段階の、あるいは神話と結び付いた技術であろう。ではその段階では、科学は存在しなかったのか。先の引用文によれば、実証的な技術が生じるのは次の段階であり、実証科学がこの技術に対応するのであれば、呪術的な技術の段階では科学は存在しない、ということになる。だが、科学と技術の平行論というシェーラーの基本的立場からすれば、技術が存在するところには科学も存在するということになるはずではないか。ここには、実証科学に関するシェーラーの議論の最大の欠陥があらわれている。つまり、彼は科学を技術との関連で捉えながらも、両者の区別を明確

に行なっていないのであり、このことによって、両者の関係も二元論に立つ平行論という曖昧な形でしか捉えられないことになってしまっている。実証科学についての定義はなされていても、技術についての定義はなされていない。しかも、シェーラーの行論は、支配のための知識という実証科学の定義が、むしろ技術にこそふさわしいものではないかという印象を私達に与える。そして、このようなことによって、実証科学が技術主義へと墮落した原因も曖昧なままに残されることになる。それは、実証科学自体の有する傾向なのか、それとも技術とのある種の結び付きによるのか、あるいは又、宗教や形而上学との関係によって惹き起こされるものなのか。シェーラーの議論からは、この間に対する明確な答えを引き出すことはできない。そしてこのことは又、彼の実証主義批判が、実証主義思想のみに向けられたものか、それとも実証科学それ自体にも向けられているのか、という点を曖昧にすることになっているのである。

アドルノとポパーの論争に端を発し、ハバーマス、アルバートラに受け継がれていった、ドイツの実証主義論争も、いつしか忘れ去られてしまったようである。だが、問題そ

のものが解決された訳ではない。又一方で、現代科学のもつ問題性はますます露になりつつあるように思える。シェラーの提起した問題——実証主義と実証科学の関係、科学と技術の関係、実証科学と他の知識との関係——は、このような問題を考察する際に欠かすことの出来ない論点を示している。既に述べてきたように、実証科学の定義、実証科学と技術の関係の捉え方など、彼の議論にはそのまま受け容れることの出来ない部分も多いが、彼の提起した問題の重要性は見落とされてはならないであろう。

註

- ① Hamilton, P.: *Knowledge and Social Structure*, R. K. F., 1974, p. 75.
- ② Scheler, M.: Über die positivistische Geschichtsp-hilosophie des Wissens, *Gesammelte Werke* Bd. 6, Bouvier Verlag, 3. durchges. Aufl., 1986, S. 30. 「知識の実証主義的歴史哲学について」『シェラー著作集 9』白水社、一九七七年、所収、四七頁。
- ③ *ibid.*, S. 29. 訳四六頁。
- ④ *ibid.*, S. 35. 訳五五頁。
- ⑤ Staude, J. R.: *Max Scheler, The Free Press*, 1967, p. 167. 新明正道「知識社会学の諸相」『新明正道著作集 第6巻』誠信書房、一九七七年、所収、一五二～一五四頁。
- ⑥ Scheler, M.: *op. cit.*, S. 32. 訳五一頁。
- ⑦ Scheler, M.: Vorwort zu *《Moralia》*, *Gesammelte Werke* Bd. 6, S. 11. 「『モラリア』のための序言」『シェラー著作集 9』一七頁。
- ⑧ Scheler, M.: Die Wissensformen und die Gesellschaft, *Gesammelte Werke* Bd. 8, Franke Verlag, 3. durchges. Aufl., 1980, S. 137. (以下 W. u. G. と略記する) 「知識形態と社会(上)」『シェラー著作集 11』白水社、一九七八年、所収、二〇四頁。なお価値自由に関しては S. 122, 訳一七九～一八〇頁参照。
- ⑨ *ibid.*, S. 140. 訳二〇七頁。
- ⑩ Scheler, M.: Vom Sinn des Leidens, *Gesammelte Werke* Bd. 6, S. 50. 「苦悩の意味について」『シェラー著作集 9』所収、七九頁。
- ⑪ W. u. G., S. 205. 「知識形態と社会(下)」『シェラー著作集 12』白水社、一九七八年、三頁。
- ⑫ *ibid.*, S. 125. 『著作集 11』一八四頁。
- ⑬ *ibid.*, S. 112. 同 一六四頁。
- ⑭ *ibid.*, S. 125. 同 一八四頁。
- ⑮ *ibid.*, S. S. 112～114. 同 一六四～一六七頁。
- ⑯ *ibid.*, S. 129. 同 一九〇～一九一頁。
- ⑰ *ibid.*, S. 76. 同 一一〇頁。
- ⑱ *ibid.*, S. 81. 同 一一七頁。
- ⑲ *ibid.*, S. 89. 同 一二九～一三〇頁。

- ②⑩ *ibid.*, S. S. 98～99. 同 一四三～一四四頁。
- ②① *ibid.*, S. 101. 同 一四七頁。
- ②② *ibid.*, S. 79. 同 一四四頁。
- ②③ *ibid.*, S. 75. 同 一〇八頁。
- ②④ *ibid.*, S. 137. 同 一〇四頁。
- ②⑤ *ibid.*, S. 92. 同 一三四頁。
- ②⑥ *ibid.*, S. 93. 同 一三五頁。
- ②⑦ *ibid.*, S. 92. 同 一三四～一三五頁。
- ②⑧ *ibid.*, S. 93. 同 一三五頁。
- ②⑨ *ibid.*, S. 126. 同 一八六頁。
- ③⑩ *ibid.*, S. 93. 同 一三六頁。
- ③⑪ *ibid.*, S. 93. 同 一三五頁。同訳書では「実証的学問は……」となっているが、シェーラーが実証科学と実証的学問とを区別していたとは考えられない。実証科学と訳すべきであらう。
- ③② *ibid.*, S. 96. 同 一三九～一四〇頁。
- ③③ *ibid.*, S. S. 96～97. 同 一四〇～一四一頁。
- ③④ *ibid.*, S. 97. 同 一四一頁。
- ③⑤ シェーラーの場合、精神科学も数学や自然科学と同様、実証的な知(das positive Wissen)というカテゴリーに含まれている。*ibid.*, S. 63. 同 九〇頁。
- ③⑥ Staude, J. R.; *op. cit.*, p. 190.
- ③⑦ W. u. G., S. 93. 『著作集 11』一三五頁。
- ③⑧ *ibid.*, S. 29. 同 三七～三八頁。
- ③⑨ *ibid.*, S. 65. 同 九二頁。
- ④⑩ *ibid.*, S. 68. 同 九七頁。なお、「実践的・技術的知能」とは、「本能行動および『試行錯誤』法による自己馴致を超えて、行動における吟味なしに新しい非定型の環境条件に……自己を適応させる能力」のことである。( *ibid.*, S. 66. 訳三八頁。)
- ④⑪ *ibid.*, S. 29. 同 三八頁。

(本学助教授 社会学)  
(平成四年四月十七日受付)